

中野香織

⑩反ドラマ映画とすれっからし観客

敦子さま。息子をつれて「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ栄光のヤキニクロード」を見てきたところです。いやあ、コンタクトレンズがはずれるくらい笑いました。

が、しかし！ 例年、このシリーズのドラマツルギーにはおぼかギャグ以上に感動するのに、今年は肩透かしをくらいました。足りないんですよ、全編を貫く太いドラマが。単発爆笑ギャグの猛連打で90分弱。そう、敦子さんご指摘の「ドラマの希薄化」現象、しんちゃん映画においても進行しているわけです。(ほんとか?)

まあ、この場合は昨年大きな賞をいくつもとってしまったことに対するテレもあるのかもかもしれませんが(なんとといっても「子供に見せたくない番組ナンバーワン」の地位を守らなきゃならない。権威になっちゃまずいでもんね)。

いづれにせよ、一貫したドラマ性をもつ純粹な虚構っていうのが、気恥ずかしい時代であるのは確か。今の観客は、すました作り物ドラマはツツコミを入れながら笑い飛ばす、という作法を会得するほど退廃しちゃってるし。そもそもテレビをつけければ、半端なドラマよりもよほど感情を揺さぶる



「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ栄光のヤキニクロード」全国東宝画系で上映中。

往復連載

ドーバー 越えて

齋藤敦子
中野香織



カット・井上陽子

「前代未聞の事実」が続々と。ドラマには分が悪い時代ですよな。

じゃあドラマが要らないかっていえばとんでもなくて、わけわからん出来事だらけの時こそ一本筋の通った濃密な感情のドラマを求めて映画館に足を運ぶようなこともあるわけで(少なくともわたしはそう)。

そういえば、最近見た映画で面白かったのが、「プロンドと柩の謎」と「永遠のマリア・カラス」なんですけど、ともに「事実」(ないし実在の人物)をネタにした虚構のドラマですね。「プロンド」のほうは1924年のオネイダ号事件を扱って、チャップリンとか新聞王ハーストとかその愛人のマリオン・デイヴィスなんかが出てくるんですが、お話は推理まじりの虚構。「マリア・カラス」は晩年のマリア・カラスを仮定法で描いた、まったくの虚構。どちらも虚構の濃いドラマを通して、実在の人物のエッセンスをかえってくっきりと立ち昇らせていた(気がした)のが秀逸でした。「事実」に生命を与えるドラマの力。

とかいいながら、ゲイのプロモーターに扮したジェレミー・アイアンズが『蝶々夫人』を歌いながら泣くカラスをのぞき見るシーンでは、「ジョン・ローンにゲイに目覚めさせられた『Mバタフライ』でも、この音楽だったよな」とくだらなくつつこむ自分がいて、我ながら情なく悲しくなりました。